

イヴァン・ジャブロンカ
歴史書元老院賞 受賞講演

2012年の歴史書元老院賞をいただき、感動と感謝の気持ちでいっぱいです。大きな栄誉を賜りまして心より御礼を申し上げます。ポーランド系ユダヤ人のサン・パピエ〔不法滞在者〕の孫である私が、本日、こうしてフランス共和国の中心機関の一つにいることを考えますと、とりわけ感動が溢れてまいります。私は審査委員会の皆様のことを個人的には存じ上げませんが、皆様のお書きになられたものはよく知っております。私は皆様の著作によって養われ、導かれ、歴史家となることができました。また、刊行に至るまでの様々な段階でお世話になった、編集の方々をはじめとするスイユ社のすべての皆様に感謝申し上げます。

さらにまた、私の家族にも大きな恩義を感じています。どちらかと言えば少人数の家族ですが、いまこの演壇からは本の中の四世代が皆様を見つめています。家族の伝記の試みであるこの『私にはいなかった祖父母の歴史』は、私の祖父母を私の娘たちにつなぐ伝達の本だからです。今日は、感謝の気持ちとしまして、私の家族について社会科学の言葉で話させていただければと思います。特異な、注目すべき運命を持った家族だからではなく、ブルデューが『自己分析のための素描』の中で言うように、様々な社会的な力によって貫かれ、恐らくそれに支配されていた家族としてお話しできればと思います。

まず社会学的な観点から申しますと、私の母方の祖父母はパリのフォブール・サンタントワヌの内装職人であり、父方のほうは、ポーランドのある村で馬具職人とお針子をしていました。他方、私は教員＝研究者であり、本日、こうして名誉ある賞をいただいて喜びの頂点にいます。したがって、祖父母と私との間には、社会学者の言う社会的上昇がありました。しかし、最も決定的な飛躍、最も困難な飛躍に成功したのは私ではなく、私の両親です。私の母は下町の職人の娘として生まれて、古典文学の上級教員資格^{アグレガシオン}を取得しました。私の父は共產主義ユダヤ人の養護施設で子供時代を過ごした後、エンジニアになりました。

父の職業的成功は、今日やや悪用され気味の用語を使うなら、「レジリエンス」[苦境から回復する力]の一形態と読むことができます。私はもちろん両親のこのレジリエンスの恩恵を被っていますが、しかし両親自身がそうした幸運を持たなかったことは明らかです。

次に、もっと歴史的に、移民の統合という角度から、私の家族についてお話ししたいと思います。私の父の両親は20世紀初頭のポーランドに生まれました。当時非合法であった共産党の地方責任者を務めていた二人は、5年の禁固刑を受けます。釈放後、1930年代の終わりに、ヴィザもなくフランスへ移民しパリに居を定めますが、数年後には逮捕されアウシュヴィッツへ強制移送されてしまいます。そして、そこで殺害されました。一言で言えば、二人は全生涯を非合法の中で過ごしたとすることができます。ポーランドでは共産主義者、フランスでは不法外国人、ヴィシー政権下ではユダヤ人。非合法性の三つの形態、世界の中にいることが許されない三つの状態——それはジェノサイドの真っ只中での抹殺という二人の最期まで続きました。

私の父の両親は、確かに、ポーランド共産党やベルヴィルのイディッシュ世界という、二人にとっての身近な環境には溶け込んでいました。しかし国民国家へ組み入れられるという、証明書類や職業、社会的地位をもって可能となる大きな統合には成功しませんでした。とは言うものの、二人はそれを欲していたのでしょうか。むしろ、国境を廃し、すべての人間を兄弟に変える、プロレタリア革命を夢見ていました。しかし彼らがそれをいくら望んだとしても、ヨーロッパには彼らのための場所はありませんでした。二人の生涯が短く、悲劇的であったのは、民主主義諸国家の無関心の視線の中で、ひとつの全体主義によって道具として利用され、また別の全体主義によって破壊されてしまったからです。

戦後、母方の祖父母は、縫い付けた星[占領下のユダヤ人に強制された徽章]を外し、父はフランスに帰化しました。私の家族は、ほかの数百万人のユダヤ人家族と同様、理性と近代性の名において西欧で進行した同化主義の大きな動きに引き付けられたのです。20世紀全体を包括的にとらえるなら、私の家族の軌跡は「ゲットーから西欧へ」の歩み¹⁾として描くことができます。またこ

の小さな家族に焦点を絞るなら、その統合は、ピウスツキ体制下の監獄から、いま私たちがいるこの素晴らしい、元老院のボフラン・サロンにまで続く歴史過程となります。

私の著作は、私の家族の運命についての、私的でもあり公的でもある考察です。しかしまた、それは歴史記述の領域における一つの試みでもあり、「私」という一人称の使用、距離と自己省察の必要性、それに歴史と記憶の関係という、三つの方法上の問題を追究しています。

第一の論点は、歴史書における「私」の使用という問題です。ディルタイからリクールまで解釈学的伝統は、主題の選択や資料の掛け合わせ、時代区分や語りのテンポなど、歴史記述のあらゆる段階において主観性が重要であることを強調してきました。また歴史家は、もっと意識的に「私」を使うこともできます。多くの著作はそれぞれ独自の屈性に自らの源泉をもっていて、歴史家は、田園やフランス共産党、移民やショア^{トロピズム}など、自分の研究主題と個別に結びつき、それに突き動かされています。数十年前から、歴史家は「自己歴史」を実践²⁾することで、自分自身の足跡や社会的出自に考察を向けるようになりました。しかし研究者として自分の家族について語ることは、私的領域としてふつう認められている境界を踏み越えてしまうように思います。

『私にはいなかった祖父母の歴史』において、「私」は少なくとも二つの機能を持っています。まず、私の家族が研究の中心的主題です。それと同時に、私の調査が語りの全体に関わり、私は社会学者や人類学者が自分の「調査手帳」と呼ぶものを目に見える形で公表しています。つまり、私は自分の語りを二重螺旋構造として構想しました。私の祖父母の人生を語ると同時に、彼らの生涯を再構成することを可能にした私の調査についても語るわけです。このように二重の「私」を働かせること、そうです、私は「実験を試みる」³⁾のが良いと考えました。非人称的な語り、すなわち、歴史家の頭の中から完全武装して出て来る過去が自分一人で行う語り、私はこうした、「あたかもそうであるかのように」歴史を語るやり方を拒否しました。私は「私」が歴史研究を壊してしまうのではなく、最もよくその客観性を保証してくれるような歴史を書きたいと望んでいます。しかし、どのような条件でそれは可能になるのでしょうか。

おびただしい主観性が社会科学の研究を殺してしまうことは明らかです。こうして当然のことながら、私は第二の論点、自己省察の必要性へと辿り着きます。

歴史学であれ、ほかの領域であれ、どんな研究も対象から距離を取ることが重要になります。しかしこの点、私は大きな努力をする必要はありませんでした。私はその距離を死によって課されました。祖母は 28 歳で、祖父は 34 歳か 35 歳で亡くなりました。二人の生涯は私の人生が始まるよりずっと以前に終わっており、私の父はわずか 3 歳で彼らと別れてしまいましたので、マテス・ヤブウォンカ [ジャブロンカ] とイデサ・ヤブウォンカは私の近親者であると同時に、また完全に未知の人たちでもあるのです。

しかしまたそれ以上に、私を私の祖父母から隔てている本当の溝があります。二人はシュテトル [ユダヤ人の村] の職人でしたが、私はフランスの歴史家です。彼らはその全存在をかけてプロレタリア革命を希求しましたが、ベルリンの壁は私が 15 歳の時に崩れてしまいました。偉大なるソヴィエト連邦を賛美した、イディッシュ語を母語とするこの二人は、私がアメリカの大学に時々英語で話しに行くことを理解できるのでしょうか。この社会的・政治的・言語的な距離、私はこれを乗り越えなければなりません。この分裂、死と時間によって穿たれたこの裂け目を、私は縫い合わせなければなりません。

そして、こうした距離を引き受けるまさにその時に、どのようにその距離を縮めようとしたのかを私は説明しなければなりません。私は透明性の要請と呼べるものに従いました。マルーが書いているように、「学問的誠実さ」を尊重するのであれば、歴史家は読み手を「その仕事の生成に立ち会」わせなければなりません。歴史家は、「なぜ、どのように自分の主題を選んだのか、そこで何を探し、何を発見したのか」、「自分の内的な道筋」はどういうものだったのか、これらを明らかにしなければなりません。一言で言えば、マルーは歴史家が「緻密な内省」に身を委ねるのが良いと結論するのです⁴⁾。私の歴史家としての仕事、調査、私の直観、確信、躊躇、疑い、成功、失敗について、私はそのすべてを示すという方針を取りました。私が活用した資料が田舎の屋根裏で偶然うまく発見した掘り出し物ではなく、ただ推論を重ねて辿り着けた史料であることを示すただけだとしても、この透明性は重要でした。私の祖父母の生涯を

語ることは無や忘却に抵抗する戦いであり、それは、ポーランドやフランスの二十か所ほどの公文書館や、自分たちの両親や移住や戦争について私に話すことを受け入れてくれた多くの証人たちのもとの、私が二人の生の痕跡を見出した仕事と分かち難く結びついています。読み手を、舞台裏、「歴史の作業場」⁵⁾に招き入れることで、歴史家は、過去の把握が結果ではなく、むしろ一つの過程、探索、さらには戦いであることを示せるのです。

第三の論点は、歴史と記憶の関係です。私の著作は伝記というジャンルに属しています。たとえそれが家族の伝記であり、このジャンルの境界に位置づけられるものだとしても、やはり伝記であることに変わりはありません。伝記を書くという仕事は、トータルな歴史、十全に社会的な歴史、個人にも集団にも関わる歴史、微視的領域もグローバル世界も扱う歴史、領域横断的でトランスナショナルな歴史、こうした歴史を可能にしてくれるものです。このようなものであるからこそ、私のように社会的なものを専門とする歴史家は伝記に強く惹かれるのです。人間の大部分を占める匿名の子供たち・女性たち・男性たちの一步一步に、そのすべての年月について行くことは可能なのか？ この意味で、埋もれてしまった人の伝記を書くことは魅惑的な仕事であるとともに、このうえない挑戦になります。アラン・コルバンは木靴職人ピナゴに関してそれを行いました⁶⁾。別の文脈では、ゲッツ・アリーが、12歳でガス室で殺害された幼いマリオン・ザムエルについて行っています⁷⁾。

しかし亡くなった人々の遺灰に専心することによって、歴史家の仕事は記憶の営みと分かち難く結びついてきます。私はショアの微視的な歴史を書こうとしましたが、その歴史の中では、主人公たちが死に行く存在ではなく、反抗し失敗し、職業を営み、ふつうに生きている人間であることを明らかにしたかったです。祖父母の足跡を追いながら、私は二人を、彼らの生の沸騰、彼らの自由の横溢に戻そうとしました。ミシュレは「生のトータルな再生」を信じていました⁸⁾。アイザック・バシェヴィス・シンガーは、「いつの日か、イディッシュ語を話す何百万もの死体が墓から起き上がるだろう」と断言しました⁹⁾。こうした降霊術師としての歴史家という肖像には私はさほど関心がありません。誰もがわかっているように、死者が再び起き上がることはないからです。記憶と

伝達の書、二人の若者の伝記である私の本は、生への賛歌です。しかしもちろんまた、それは紙上の墓、紙上の碑でもあり、ミシェル・ド・セルトーの言うように、「家にいない人たち」のために歴史家が建てる^{セノタフ}記念碑なのです¹⁰⁾。

正確さの要請、「正義を書く」要求、さらにまた負債の意識、私はこれらに発する倫理に従いつつ、歴史と文学の間に、ジェノサイドの、最も真実な語り方を探求しました。そうすることによって、語りは学術を歪めてしまうとか、大きな歴史は小さな歴史を支配しているとか、歴史と記憶は衝突するとかいう、誤った対立関係と私が考えるものを乗り越えようと思いました。

皆様ご存知のように、私は突然の啓示や、徐々に作られた嗜好によって歴史に辿り着いたわけではありません。歴史の方が私に、私たちにやってきました。歴史が私たちをその怒濤の中に砂利のように転がしたのです。自分の家族を死に追いやった国に人は結びついていられるものなのだろうか？ 私の祖父が証明書類がないために1939年にサンテ刑務所に収監されたことと、私がフランス人歴史家としてキャリアを築いていることの間は何が起こったのだろうか？ 私はどういう社会的錬金術の産物なのだろうか？ 私の著作はどれも、こうした問いに私が答える、社会的に利用可能な公的な解答です。歴史研究は私たちの歴史的条件への「反撃」である——ポール・リクールはこの言葉はきわめて正しいものです¹¹⁾。

私が過去に結びつけられている様々な絆——強制移送者の孫であること、孤児の息子であること、フランス人研究者であること——は、三つながら絡み合って私の研究全体を貫いています。このつながりによって、私の仕事は、〈子供時代と見捨てられること〉、〈若者たちの犯罪と統合〉、〈国家と共和国モデル〉というテーマに結びついています。迷い、根拠ぎされ、拒絶され、傷つけられた子供たちに私は親愛の情を抱いています。彼らが私の父に似ているからであり、また、皮肉なことですが、そうした子供たちは、私が実際そうであった、不安にさいなまれる少年と、なにに不自由なくかわいがられた子供という二重のイメージを私に思い起こさせてくれるからです。「初めに死があり、忘却があった。この忘却に抗して、私の全存在は反抗する」とショニユは書いています¹²⁾。私自身、「望ましからざる」二人の孫として、決して忘れはしないと心

に誓いながらビルケナウの白樺の森をさまよった者です。受け継いだこうした遺産、やや不安定なこうした状況は、私が歴史を研究するやり方に影響を与えています。フランス人でありかつまたユダヤ人でもありえるように、歴史家としても孫としても市民としても過去を見ることができるよう、人は何キロメートルにも及ぶ資料を涉猟し、事実を確定しようと偏執狂的に働き、しかも方法上の規則を曲げようと決断することもできるのです。

ご清聴、ありがとうございました。

(訳・田所光男)

注

- 1) Charlotte Roland, *Du ghetto à l'Occident. Deux générations yiddiches en France*, Paris, Minuit, 1962.
- 2) Pierre Nora (dir.), *Essais d'ego-histoire. Maurice Agulhon, Pierre Chaunu, Georges Duby, Raoul Girardet, Jacques Le Goff, Michelle Perrot, René Rémond*, Paris, Gallimard, 1987.
- 3) « Tentons l'expérience », *Annales ESC*, vol. 44, no. 6, 1989, p. 1317-1323.
- 4) Henri-Irénée Marrou, *De la connaissance historique*, Paris, Seuil, 1954, p. 240.
- 5) François Furet, *L'Atelier de l'histoire*, Paris, Flammarion, 1982.
- 6) Alain Corbin, *Le Monde retrouvé de Louis-François Pinagot. Sur les traces d'un inconnu, 1798-1876*, Paris, Flammarion, 1998.
- 7) Götz Aly, *Im Tunnel. Das kurze Leben der Marion Samuel, 1931-1943*, Francfort, Fischer Taschenbuch Verl., 2004.
- 8) Jules Michelet, « Préface » (1869), *Histoire de France*, Paris, Armand Colin, 1962.
- 9) Isaac Bashevis Singer, *Discours de réception du prix Nobel de littérature*, 1978.
- 10) Michel de Certeau, *L'Écriture de l'histoire*, Paris, Gallimard, coll. « Folio histoire », 1975, p. 138-142.
- 11) Paul Ricœur, *Histoire et vérité*, Paris, Seuil, coll. « Points Essais », 1955, p. 32.
- 12) Pierre Chaunu, « Le fils de la morte », in Pierre Nora (dir.), *Essais d'ego-histoire...*, *op. cit.*, p. 61 sq.